

日本側拠点機関名	東京外国語大学
日本側コーディネーター所属・氏名	アジア・アフリカ言語文化研究所・品川大輔
研究交流課題名	アフリカにおける言語多様性とダイナミズムに迫るアフリカ諸語研究ネットワークの構築
相手国及び拠点機関名	タンザニア：ダルエスサラーム大学，南アフリカ：ヴェンダ大学 ウガンダ：マケレレ大学，ザンビア：ザンビア大学 ボツワナ：ボツワナ大学

## 研究交流計画の目標・概要

**[ 研究交流目標 ]**交流期間(最長3年間)を通じての目標を記入してください。実施計画の基本となります。

本研究計画は、アフリカ大陸で現在話される2,000を超すとも言われる現地民族語の記述言語学的研究を推進するとともに、日本およびアフリカの若手言語学者の育成をとおして、アフリカが有する文化的資産としての言語多様性を持続可能な形で維持・促進することを目的とした国際的研究拠点および拠点間ネットワークを構築することを目標とする。

アフリカは、世界の約7,000言語のうちの約30%に相当する言語を抱える多言語大陸である。しかしこの言語多様性は、一部の言語については詳細に研究されといえるとはいえず、多くの民族語について未だ十分な記述研究がなされておらず、学術的にその全貌を把握しているとはいえない。そのような状況においてまず取り組まなくてはならないのは、言語学的な研究の蓄積が少なく、かつ次世代への継承が危ぶまれる少数民族語を対象にした学術的精度の高い言語記述研究である。にもかかわらず、アフリカ諸国において言語記述を専門的に行う研究機関は少なく、とりわけ現地の記述言語学者の育成が立ち遅れていることは、世界のアフリカ言語学コミュニティ全体が抱えている大きな課題である。このような現状を踏まえ、民族語記述研究に精力的に取り組むタンザニア・ダルエスサラーム大学人文学部外国語・言語学科(UDSM/FFL)および南アフリカ・ヴェンダ大学 M. E. R. マティバ・アフリカ言語研究センター(UniVen/MCAL)とをアフリカ側拠点とするアフリカ諸語共同研究ネットワークを構築し、この状況に対する画期的な変化をもたらすような貢献をなすことを目指す。

日本側研究拠点の東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(ILCAA)は、本計画のアフリカ側研究拠点において指導的地位にある研究者と現在に至るまで研究パートナーとしての双方向的な協力関係を維持している。ILCAAが培ってきたこのような研究者レベルの交流を機関レベルのネットワークへと発展させるとともに、現在遂行中の教育・研究プログラムを有機的に関連させることで、若手研究者育成と現地への成果還元を志向する世界レベルのアフリカ言語記述研究のための拠点間ネットワークを構築していく。

**[ 研究交流計画の概要 ]** 共同研究、セミナー、研究者交流を軸とし、研究交流計画の概要を記入してください。

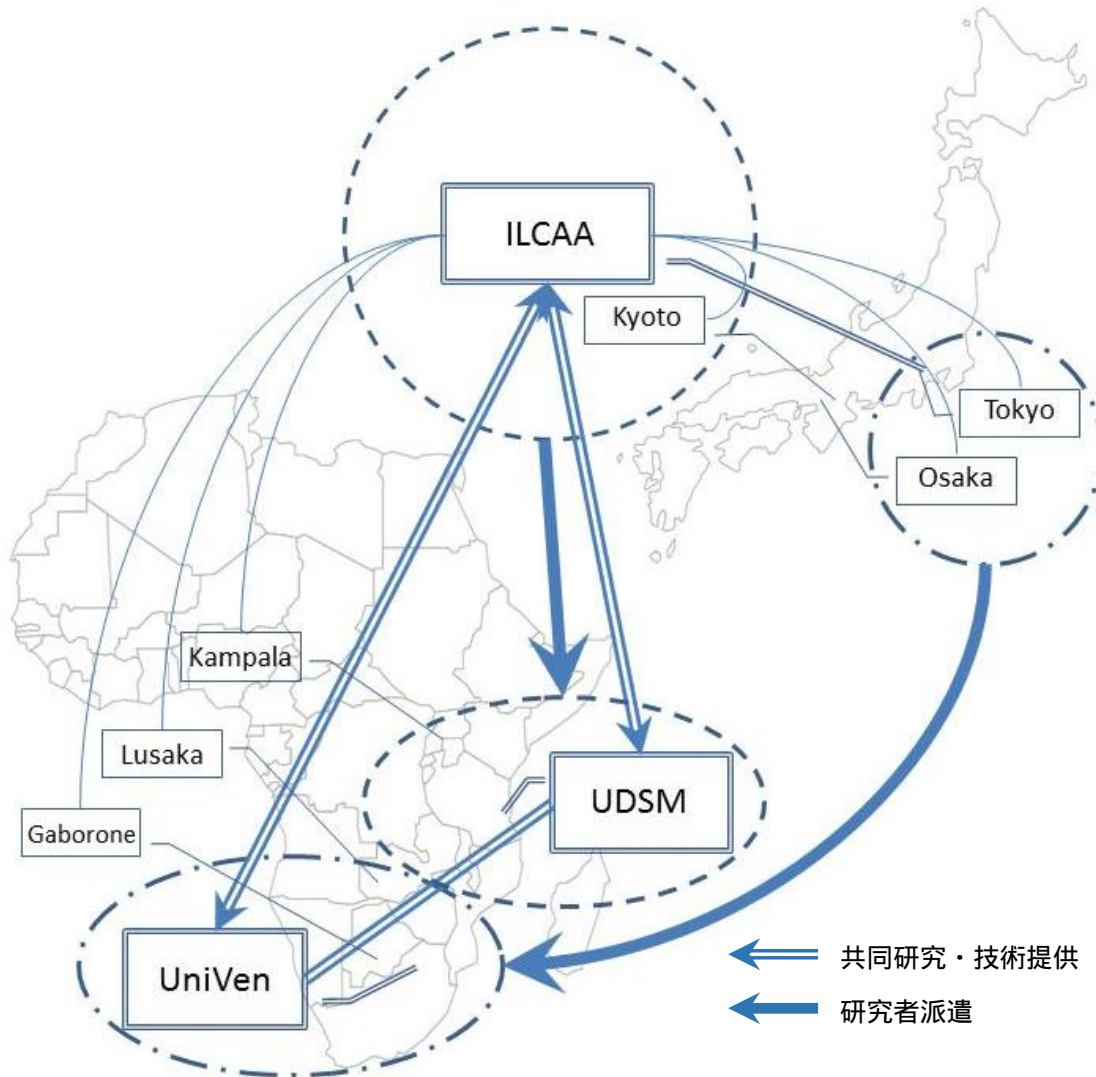
本事業計画の要点は、(I)「アフリカにおける現地民族語の記述研究およびアフリカ固有の多言語状況や言語接触に起因する言語変化のダイナミズムを捉えるための言語ドキュメンテーション研究」、(II)「言語多様性を持続可能な形で促進することに寄与するための日本および現地の若手研究者育成」の二点である。これらの目的を達成すべく、若手を含めた双方向的な研究者交流を常態的に行う。そのうえで、本研究活動による具体的なアウトプットを促すために、主として(I)に対応する活動として共同研究の組織化、(II)に対応する活動として若手研究者育成を主眼とするセミナー(ワークショップ)の二本の活動軸を設ける。

共同研究の具体的なテーマとしては(1)十分な研究蓄積のない現地民族語に関する記述言語学的研究、(2)「多言語状況下での言語動態に関する研究」、(3)「地域コミュニティにおける言語状況の変容に関する社会言語学的研究」を構想しており、これらに関する共同研究を、複数の拠点に属するメンバーを有機的に組織化したジョイント・プロジェクトとして推進していく(具体的内容は、1.【重要性・必要性】で詳述)。

一方のセミナーについては、日本・アフリカ双方の連携機関に属する大学院生や若手研究者を対象に、言語ドキュメンテーションのためのワークショップを開催する。音声分析、テキストデータの形態素解析、映像データ処理を含む言語ドキュメンテーションのためのスキルやその教授に関するノウハウはILCAAにすでに蓄積されており、これを活用することで、日本の若手研究者のみならずアフリカの若手研究者の記述と分析のスキルの質的向上を促し、アフリカの多様な言語を調査・分析できる日本の、そして現地の若手研究者の育成に貢献する(具体的内容については、2.【若手研究者育成への貢献】で詳述)。

[実施体制概念図] 本事業による経費支給期間（最長3年間）終了時までには構築する国際研究協力ネットワークの概念図を描いてください。

本事業計画の構想する拠点ネットワークの概略を、以下に図式化しつつ提示する。



□で示したものは、中心拠点機関である。本研究計画の両輪である(I)ドキュメンテーション研究、(II)若手研究者育成の推進拠点に位置付けられるとともに、共同研究、ワークショップの実施主体として、人材交流活動のミーティング・ポイントの機能を担う。日本側拠点機関のILCAAは、事業計画全体の統括を行う。具体的には、共同研究の成果とりまとめおよび発信の責任母体として、また若手研究者育成ワークショップにおいては、言語ドキュメンテーションに関する技術提供を行う。UDSM/FLLは東アフリカの、UniVen/MCALは南部アフリカの拠点機関であり、現地民族語を対象とした共同研究のホスト、ならびに若手研究者の受け入れおよび現地ワークショップの開催拠点となる。また、以下に言及するサブ拠点を含むアフリカ側拠点からの研究者派遣は、原則としてILCAAが受け入れる。

○で示したものは、連携機関ないし研究者コミュニティ（以下サブ拠点）である。日本側のサブ拠点は京都（サブ拠点代表：京都産業大学・京都大学 梶茂樹教授）、大阪（大阪大学 米田信子教授）、東京（国際基督教大学（ICU）李勝勲准教授）、アフリカ側のサブ拠点は、ハボローネ（連携機関担当者：ボツワナ大学 Ethelbert Kari 准教授）、ルサカ（ザンビア大学 Sande Ngalande 博士）、カンパラ（マケレレ大学 Celestino Oriikiriza 博士）に置く。これらサブ拠点から、共同研究の参加研究者ならびに若手研究者が集められる。

---で囲った日本側拠点は、東アフリカ地域を主たる研究対象とする研究者が属しているため、同地域に重点的に人材派遣を行う。同様に、---で囲った日本側拠点は南部アフリカ地域への研究者派遣が中心となる。